

随筆

わがラグビー人生 ラグビーは人生のやりがい

東海学園大学 学長 いしかわ きよし
石川 清 (S52年卒)

この度は、時報事務局より「随筆」寄稿のご依頼を頂きましてありがとうございます。私の「ラグビー人生」について執筆させていただけることを大変光栄に思っています。

私のラグビー歴

旭丘高校でラグビーを始め、名古屋大学では工学部4年間+大学院1年間+医学部6年間の11年間。社会人では東海ドクターズクラブでキャプテンを務め12年間。名古屋市立大学在任中は同大学ラグビー部長。カナダ留学中の2年間はクラブチーム「トロントライオンズ」に所属。40歳からは東惑クラブにも所属。この間、愛知県ラグビー協会医務委員を務めた。42歳で現役を引退するまでの26年間、ラグビーは私の人生の中心であった。

ラグビーとの出会い

私のラグビー人生は、兄の影響で高校時代に始まった。兄は西陵高校でラグビーをやっており、全国大会に出場する強豪校で活躍していた。兄が家にボールを持ち帰ってくるのを見て、自然とラグビーに興味を持つようになった。当時の旭丘高校もラグビーの名門校で、厳しい練習と伝統を誇っていた。入部当初は30人以上いた同級生も、厳しい練習についていけず次々と退部し、最後まで残ったのは半分以下の15人であった。特に夏合宿は死ぬ思いであった。怖い先輩たちが大勢来て、容赦なくしごかれた。しかし、その厳しい練習後に飲んだ水のおいしさは、今でも忘れられない。「この夏合宿を乗り切れば、これからの人生どんな試練も乗り越えられる」と真剣に思った。この経験は、その後の人生における困難に立ち向かう際の心の支えとなった。

ラグビー精神との出会い

私がラグビーを続けられた最大の理由は、ラグビー精神や自己犠牲の精神というラグビーの魅力に取りつかれたからである。特に、自己犠牲の精神が大好きであった。自分はタックルされて犠牲になっても、味方の仲間にパスをして、仲間がトライをするという考え方に深く共感した。当時は、ラグビー以外のスポーツは考えられなかった。旭丘高校は文武両道の校風で、クラブ活動と勉強の両立が当たり前であった。練習で疲れ切って帰宅しても勉強をしなければならず、必然的に朝型の生活習慣が身についた。夕食後すぐに就寝し、早朝に起きて勉強するという習慣は今でも続いており、現在の私の健康長寿の基礎となっている。

工学部時代のラグビー

1966(昭和41年)年4月、名大工学部航空科に入学したが、正直なところ、学業よりもラグビーをするために大学に行っているような状態であった。授業にはあまり真面目に出席せず、友人のレポートを借りたりして、卒業するための単位だけは何とか取得していた。大学院1年の時、いよいよ就職する段になって就職活動で航空機関連の大企業を訪問したところ、大きな会社の歯車のひとつになって働くことが自分の「人生のやりがい」にはどうしても思えなかった。そんな頃、兄が勤務していた金沢の重症心身障がい児施設である医王園(後の医王病院)を訪ね、兄が重症心身障がい児医療に人生を捧げ、患者や家族から頼りにされ、感謝されてやりがいを持って働いている姿を見て感動し、医学部に入り直すことを決意した。

医学部時代のラグビー

1971(昭和46年)年4月、大学院を1年で中退して名大医学部1年生になった。このとき、同じように学士入学した者は5人いた。医学部の2年間の教養課程の単位を、すでに取得していた工学部の単位を認めてもらうように医学部長に手紙で上申した。当時の医学部長は高木健太郎先生で、ラグビー部の顧問でもあったためか、私の訴えに耳を傾け、工学部での単位を認めてもらうことができた(学士入学者が5人もいたことから制度として正当に認められた)。医学部再入学後も、ラグビーへの情熱は衰えず、教養の2年間は思う存分ラグビーをすることができた。結局、医学部の6年間も後輩たちと一緒にプレーを続け、全学ラグビー部と医学部ラグビー部の両方に所属した。普段は全学ラグビー部で練習し、合宿と試合だけ医学部ラグビー部に合流する生活を送った。結果として、工学部時代の4年間と医学部時代の6年間、合わせて10年間東海リーグの公式戦に出場することができた。

集中治療とラグビーの両立

医学部卒業後は集中治療がやりたくて麻酔科を専攻し、名市大麻酔科に入局した。ICUでの集中治療の仕事は月7



名古屋大学ラグビー部時代

～8 回の当直があり、身体的にも精神的にもかなり厳しいものであった。働き方改革が叫ばれる今では月 4～5 回が普通であるが、当時は 3 日に 1 回は当直で、徹夜になることも多かった。それでも好きなラグビーは続け、東海ドクターズに所属して社会人リーグで月 1～2 回の試合に出場していた。キャプテンとして必ず試合に出るために、当直のスケジュールも試合を優先して決めていた。時には当直明けの試合もあった。当時は働き方改革もなく、自己責任という風潮が強かった時代であり、今から思うと、集中治療の仕事とラグビーの両立をよくやっていたものだといながら感心する。これができたのも、集中治療の仕事もラグビーも、どちらにもやりがいを感じていたからである。



カナダ留学中（トロントライオンズ）

留学時代のラグビー

カナダ留学時代も、トロントライオンズというクラブチームに所属し、週 1 回の練習と月 2 回程度の試合に参加した。イギリスからの移住者が多く、本場のイギリス流ラグビーの雰囲気を楽しむことができた。試合後は家族同伴でパブに集まり、お酒を飲みながら歓談するのが習慣であった。言葉の壁を感じる留学生活の中で、ラグビーは私にとって大切なストレス発散の場となった。留学中、所属していた東惑クラブがバンクーバーに遠征した際には、トロントからバンクーバーまで車で出かけて試合に合流したこともある。1 日 1000 キロ近く走り、数日かかってバンクーバーに到着したが、試合とパーティーに参加して、家族ともども楽しい時を過ごした。こんな経験も、ラグビーならではの貴重な思い出となっている。

家族とラグビー

当時、小さな子どもが 3 人いたので、週末のラグビーの試合は家族サービスを兼ねていた。試合でのけがは日常茶飯事で、擦り傷程度なら気にも留めなかった。しかし、救急車で運ばれたことが 2 度あった。1 度は東京遠征の試合で、頭部の切創で 10 針ほど縫うけがを負った。もう 1 度は名古屋市内のグラウンドで胸部を強打し、愛知医大に運ばれて胸骨骨折と診断された。そのとき、チームメイトの一人が妻に「ラグビーの試合でけがをして愛知医大に運ばれた」と連絡したものの、その後の連絡が途絶えてしまった。妻は心配のあまり家のテーブルの周りをぐるぐる回っていたそうで、それを見ていた幼い子ども 3 人も、妻の後をついて同じようにぐるぐる回っていたという。後でその話を聞き、その様子を想像して笑い転げた。一方で、妻の心配は相当なものであったようだ。そんなこともあってか、妻はラグビーが大嫌いになり、「私は rugby widow（女やもめ）だ」が口癖となった。しかし、内心は妻も人生のやりがいとしていた私のラグビーを応援してくれていたようだ。

ラグビーで致命的なけが

42 歳のとき、関西ドクターズとの定期戦で左膝半月板・靱帯損傷という致命的なけがを負った。それまでも何度かけがで救急車のお世話になったことはあったが、このときのけがは 2 度の手術と 2 年ほど続いた膝の痛みにより、ついにラグビーを断念せざるを得なくなった。男の厄年である 42 歳に大きなけがを負い、ラグビーを諦めなければならなくなったことは、昔の人の言う厄年の重みを実感する出来事であった。それ以後はラグビーからテニスに転向し、テニスが人生のやりがいとなった。（わがテニス人生「たかがテニス、されどテニス」：名大医学部学友時報第 833 号に寄稿）

医者の不養生

振り返ってみると、高校時代からラグビーで鍛えた身体をもとに、集中治療の仕事でも身体を酷使して働いてきた。不規則な生活や睡眠不足が続いていたにもかかわらず、ラグビーを続けられていたことで、自分の健康に対する不安はまったく感じていなかった。今の時代なら安全管理上大問題であるが、まさに「医者の不養生」そのものであった。

ラグビーから学んだこと

ラグビーは私に多くのことを教えてくれた。特に「人生のやりがいの大切さ」や「たとえ嫌なことや大変なことがあってもやりがいがあれば乗り越えられる」ことを学んだ。また、高校時代から培った規則正しい生活習慣と運動習慣の大切さも、ラグビーを通じて学んだことだ。何より、高校、大学、社会人のチームと一緒にプレーしたラグビー仲間は、かけがえのない一生の親友となり、人生の貴重な宝となった。ラグビーを通しての人とのつながりは、他のどんな交友関係よりも強固だと感じている。

おわりに

現在は毎日の早朝テニスで運動習慣を継続しているが、ラグビーから学んだ「人生のやりがいと規則正しい生活習慣・運動習慣が健康長寿の秘訣」という信念は、今も私の人生の指針となっている。ラグビーは単なるスポーツではなく、私の人生そのものを形作ってくれた大切な存在であった。これからも、ラグビーから学んだ教訓を胸に、健康長寿を目指して生きていきたいと思っている。